

「ウズ」「ウズル」の衰退に関する一考察

京, 健治
島根大学法学部助教授

<https://doi.org/10.15017/10341>

出版情報 : 文献探究. 39, pp.1-10, 2001-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

「ウズ」「ウズル」の衰退に関する一考察

京 健 治

1. はじめに

1) 「このことが成就いたさば、これより毎年宝の車を贈らうず。さないものならば、その方より毎年宝を賜はれ」 (天草版伊曾保物語・434)

2) 「汝これを現はすにおいては、普代のところを赦免して、その上に財宝半分を与へうずる」と約束せられた。 (天草版伊曾保物語・419)

用例1・2に見える助動詞「うず」「ウズ」「ウズル」は室町期には一般的であったが、近世期になると急速に衰退の一途を辿るようである。

この「ウズ」「ウズル」の衰退に関してはこれまでも言及されてはいるが、なお考うべき余地も残されているように思われるので、ここで改めて考えてみようと思う。

2. 近世初期に於ける「う」優勢の動向と「ウズ」「ウズル」の消長

「ウズ」「ウズル」の衰退理由を考えるにあたって、蜂谷清人氏「助動詞『う』『うず』『うずる』の語形・用法に関する一考察—狂言古本を中心に—」(『国語学』86集)が示唆的である^{注1}。蜂谷氏は室町末期では「うず」系列の語と「う(よう)」系列の語とがほぼ拮抗しているか、あるいは「うず(る)」優勢の状況にあるが、江戸時代初の資料では「う(よう)」優勢の傾向を示すと指摘しておられる。

いま、キリシタン資料・狂言資料のいくつかについて、「ウズ」「ウズル」「ウ」の用例数を示すと表1のようになる。

文 献	ウ ズ	ウズル	ウ
天草版平家物語	140	368	655
天草版伊曾保物語	41	76	130
虎清本	1	19	176
虎明本	71	213	3576
天理本	131	54	2201
狂言記	56	22	736
続狂言記	9	1	1171
狂言記拾遺	3	10	791

[表1]

全般的に見ると「ウ」優勢の流れにあって、「ウズ」「ウズル」がその勢力を徐々に弱めていく様相がうかがえよう。

さて、「ウズ」「ウズル」という語形に注目して、その使用状況を見るに「ウズル」優勢から「ウズ」優勢へと両者の使用の割合が逆転するといった様相を呈している。

『天草版平家』では「ウズ」140例、「ウズル」368例、『天草版伊曾保』では「ウズ」41例、「ウズル」76例となっており、「ウズル」の割合が高い。この傾向は狂言資料の『虎清本』『虎明本』でも同様であり、前者には「ウズ」1例、「ウズル」19例、後者には「ウズ」71例、「ウズル」213例が見られる。『天理本』では「ウズ」131例、「ウズル」54例となっており、「ウズ」が多いという様相を見せている。以下、『狂言記』『続狂言記』でも同様に「ウズ」が多いという状況にある。なお、『狂言記拾遺』では「ウズ」3例、「ウズル」10例であり、「ウズル」のほうが多くなっているが、「ウズ」「ウズル」の推移を大まかに捉えれば、「ウズル」優勢から「ウズ」優勢の傾向にあると見てよからう。

「ウズ」「ウズル」はその衰退の途次、「ウズル」優勢から「ウズ」優勢という様相を呈するのであるが、かかる推移は「ウズ」「ウズル」の用法との関係からするとやや問題がありそうに思われる。表2を参照されたい。表2は表1で取り上げた各資料に見られる「ウズ」「ウズル」をその用法別に分類整理したものである。なお、分類項目は次の通りである。

- ①「ーウズ」「ーウズル」の型で終止するもの
- ②文末で「と」「など」が下接するもの
- ③文末の助詞「ぞ」が下接するもの
- ④文末の助詞「か」が下接するもの
- ⑤助詞「が」「は」「を」「に」「にて」が下接するもの
- ⑥名詞（形式名詞）が下接するもの
- ⑦助動詞「やろう」「らう」が下接するもの
- ⑧助詞「よなう」が下接するもの

	天草版平家		天草版伊曾保		虎清本		虎明本	
	ウズ	ウズル	ウズ	ウズル	ウズ	ウズル	ウズ	ウズル
①	92	4	32	2	1	4	60	42
②	32	132	9	43	0	2	3	61
③	0	5	0	0	0	2	0	35
④	1	20	0	0	0	2	0	8
⑤	0	49	0	4	0	6	0	41
⑥	5	158	0	27	0	3	4	26
⑦	10	0	0	0	0	0	3	0
⑧	0	0	0	0	0	0	1	0
計	140	368	41	76	1	19	71	213

	天理本		狂言記正編		続狂言記		狂言記拾遺	
	ウズ	ウズル	ウズ	ウズル	ウズ	ウズル	ウズ	ウズル
①	1 1 1	0	5 5	4	8	0	3	0
②	1 2	2 6	1	0	1	1	0	0
③	0	3	0	0	0	0	0	2
④	0	1	0	0	0	0	0	0
⑤	0	8	0	4	0	0	0	6
⑥	4	1 6	0	1 2	0	0	0	2
⑦	3	0	0	0	0	0	0	0
⑧	1	0	0	2	0	0	0	0
計	1 3 1	5 4	5 6	2 2	9	1	3	1 0

[表 2]

表 2 に見るように、「ウズル」は各資料によって、若干の違いは見られるものの、概ね終止・連体用法に使用されているのに対して、「ウズ」は終止法—特に①用法—に偏用されており、その使用状況に違いが認められるが、その用法が限定的な「ウズ」が「ウズル」に比してなお遅くまで勢力を有していたかのように見えるのは何故であろうか。以下、この問題について考えてみようと思う。

3. 「ウズ」「ウズル」の用法—終止法について—

「ウズ」「ウズル」はその衰退の途次、「ウズル」優勢から「ウズ」優勢という様相を呈するが、かかる推移については「ウズ」「ウズル」の用法からみて問題がありそうだと述べた。すなわち、「ウズ」は終止法に偏用されており、「ウズル」に比して、その用法が限定的であったのであり、かかる「ウズ」が「ウズル」よりも多用されたのは何故かが問題である。そのことを考えるために「ウズ」が集中して使用される終止法の様相をもう少し詳しく見ておくことにしよう。

「ウズ」「ウズル」が終止法に使用される場合、「ウズ」は< 対句的表現や中止法といった前文から後文へと対比・添加・展開する文脈の中途に位置することが多い > のに対して、「ウズル」は< 発言の終わりにあることが多く、発言を言い収める性質がある > という用法の差違が認められる。

用例 3～6 は「ウズ」「ウズル」に見られる上記の用法の差違を端的に示した例である。

- 3) 「我昨日の約束のごとく、海の水をことごとく飲み尽くさうず。しかれども、まづ諸々の川の流れを堰き止められい。その後、海をことごとく飲まうずる」

(天草版伊曾保・418)

- 4) 「左右なう走り出るならば、あれも逃げうず。所詮武略をして近付かうずる」
(天草版伊曾保・459)
- 5) 「…いよいよお煩ひの元ともならうず。しからば、罷り帰って身をも浄めて参らうずる」
(天草版伊曾保・467)
- 6) その人が亡びたらば、その国は明かうず、その人が失せたらば、その官にはならうずるなどというて、…
(天草版平家・14)

以下、「ウズ」「ウズル」のそれぞれについて、いくつか例を見ながら、その用法上の特徴を確認しておくことにしよう。まず、「ウズ」から見ていくことにする。

用例7～12に示した「ウズ」はくそこで文が終わらず、次に続いていく氣息が感じられるもの>である。

- 7) 「もしこのことをエソポが知らば、定めて奏聞申さうず。その時は悔ゆるとも、かひがあるまじい」
(天草版伊曾保・433)
- 8) 「某只今家に帰らうず。その暇を下されい」
(天草版伊曾保・440)
- 9) 「我にその半分を下されば、こしめす様を教へませうず。その蝸牛を取って、高う飛び上がり、石の上に落とさせられい」
(天草版伊曾保・449)
- 10) とても、我只今そなたから食はれうず。しからば、多年好いた道であれば、最後に一奏舞うて死なうず。一曲添声にあづかれ
(天草版伊曾保・481)
- 11) 兩人のいひぶんいづれをいつれともわれぬ程に、せうぶをさせて、かたつ方へーのくひをやらふず、せうぶは何をせうぞ
(虎明本「牛馬」)
- 12) 某が存るには、まつほこさきへわたらふず、其跡に、大きな山を二つつくつて、…何とござあらふずぞ
(虎明本「くじざい人」)

用例13～19に示すのはく対句的表現の前句に位置する>用法である。

- 13) 「某申し当てたならば、諸人御身を崇敬致さうず。もし申し損ずるとも、私一人の不覚でこそござらうずれ」
(天草版伊曾保・426)
- 14) 「このことが成就いたさば、これより毎年宝の車を贈らうず。さないものならば、その方より毎年宝を賜はれ」
(天草版伊曾保・434)
- 15) 後句をついたらはとをしまらせうず、つがずはとをしまらすまひ
(虎明本「いもじ」)
- 16) 語つたらば、政頼であらふず、語らずは、政頼では、あるまひ (天理本「政頼」)
- 17) 俳諧をして、身がし勝つたらば、あの松を取らうず、し負けたらば、取るまいと云
(天理本「富士松」)
- 18) 本の所において今一度いさせて・あたつたらあちへやらうす・あたらずは汝かにせいト云
(和泉家古本六議「雁礫」)
- 19) お暇を下されて本国に下る・そなたも名残おしうおもやらうす・それかしも名残おしうて是は迷惑なト云
(和泉家古本六議「墨塗」)

次に「ウズル」を見てみよう。「ウズ」は<対句的表現乃至中止法>など、文の中途に位置する用法に多用されるという特徴が見られた。「ウズル」にも20・21のように<文の中途>に使用される例がないわけではないが、その多くは22以下に示したように文末に使用されるものである。

- 20) 「今日より御辺を主人と敬はうずる。かの鳶といふは賤しい無道人が、我らを侮り卑しむれば、頼み奉る」 (天草版伊曾保・455)
- 21) 「…いざさらば、今度は我らが一門先を駆けて、軍を始めうずる。各々跡を黒めさせられい」 (天草版伊曾保・461)
- 22) 「…しからば、食した人は必ず現はれませうずる」と申せば、… (天草版伊曾保・412)
- 23) 「汝これを現はすにおいては、普代のところを赦免して、その上に財宝半分を与へうずる」と約束せられた。 (天草版伊曾保・419)
- 24) 「…たとひ、当時はいろいろに仰せらるるとも、時刻をもって、是非に本望を達せうずる」と申した。 (天草版伊曾保・420)
- 25) 「少しも御気遣ひあられそ。たやすうお中を直しまらせうずる」 (天草版伊曾保・424)
- 26) 「このことは浅からぬ不審ぢやほどに、思案をして答へうずる」 (天草版伊曾保・426)
- 27) 「まづエソポに談合してお返事を申さうずる」 (天草版伊曾保・428)
- 28) 「この答話をば明日言上仕らうずる」 (天草版伊曾保・439)
- 29) 「我は今より各々に一味をいたすまい。ただ人間と入魂をせうずる」 (天草版伊曾保・453)
- 30) かたつてきかせ申さうずる (虎明本「せいらい」)
- 31) 此所にてぬしをもいたさうずるとぞんじて下り申て候 (虎明本「ぬし」)

以上、「ウズ」「ウズル」の用法を見てきたが、両者はその使用状況も異なり、さらに終止法にもおいても、「ウズ」が<対句的表現や中止法に使用される例が多い>のに対して、「ウズル」は<発言の終わりにあることが多く、発言を言い収める性質がある>という用法上の相違が認められるのである。こうした用法上の相違は「ウズ」「ウズル」の消長を考えていく上で看過できない点であろうと思われる。

4. 近世初期に於ける「う」の優勢と「ウズ」「ウズル」の消長

「ウズ」「ウズル」の衰退時期の遅速に関して、「ウズ」に特徴的なく対句的表現乃至中止法>という用法が関係しているとする見解が蜂谷氏にある注2。

近世初期では室町末期と比べ、「う」優勢の傾向が著しいが、そうした中であって「ウズ」が<対句的表現乃至中止法>として積極的な働きを果たしているとされる。

きく事もあらふず、又きかぬ事もおりやらふ（虎明本・うつぼざる）

おこせずともとらふず、おこすともとらふ（虎明本・樽聳）

さうも御さらうず、きゝそこなひであらふと云（天理本・はりたこ）

身ごしらへもいたさうず、るすの義を申つけうと云（天理本・泣尼）

のように「……うず、……う」の形が多く認められるが、これも「う」の優勢の中で、「うず」が中止法ないし対句的表現に積極的な役割を果たしていることを知る。

この中止法ないし対句的表現の「うず」は、例えば一般の終止には「う」のみを用いている説教節正本（横山重氏編『説教正本集』による）でも、

大郎殿の御いけん、きく事もあらうず、又きかぬ事も御さらう

（さんせう太夫《与太郎正本》下、一 21 頁下）

よきときはそおふず、あしき時はそうまいのけいやくは申さず、あしきときそ
うてこそ、ふうふとはもうそうに、

（せっきやうしんとく丸《佐渡七太夫正本》下、一 114 頁上）

のように見られるのであって、この用法における「うず」の頻用が、江戸時代以降「うずる」と「うず」のうち、後者を残す（いずれにせよ勢力はないが）一つの原因になっているものと思われる。

すなわち、「う」優勢の傾向を示す狂言資料等に於いて、「ウズ」が<対句的表現乃至中止法>に積極的な働きを果たしているとされ、さらに「ウズ」が「ウズル」に比して遅くまで命脈を保っていたのはこの語の有する<対句的表現乃至中止法>という点に関係しているのであろうと説かれる。

蜂谷氏の指摘されるように「…ウズ、…ウ」となった例が狂言資料では比較的多く見出せる。以下にいくつか示そう。

32) ひとつきの内を、廿五日は上京へまいらふず、五日はそなたへゆかふ

（虎明本「どん太郎」）

33) 三十一字よりおほひもあらふず、すくなひもあらふまでよ

（虎明本「はぎ大名」）

34) 一だんで御ざる、さらは、なゝゑと申時には、扇のほねを七つひけでみせまらせ
うず、又八重と申〇時は九つ、十ゑさき出ると云時は皆ひろげて御目にかけうず、
はぎの花かなといふぶんはなりまらせう

（虎明本「はぎ大名」）

35) 皮は、引敷にせうず、身はおつけにして食はう

（天理本「狐塚」）

前節で終止法の「ウズ」「ウズル」を見たが、そこでは文の中途が「ウズ」、文末が「ウズル」となった例（「…ウズ、…ウズル」）も見られた。ここで用例4を再掲しよう。

4) 「左右なう走り出るならば、あれも逃げうず。所詮武略をして近付かうずる」

狂言資料に多く見られる「…ウズ、…ウ」はその「ウズル」が「ウ」に置き換わったような形になっている。

こうしたことからすると「ウズル」は「ウ」優勢の流れのなかに、早く取り込まれていったものと解することができそうであり、室町末期から近世初期かけてみられる「ウズル」優勢から「ウズ」優勢といった展開はこうしたこと反映したものであらうと考えてよかろう。さらに「ウズ」が「ウズル」よりも遅くまで使用されていた理由について、この語の有する上記の用法が関係しているとする蜂谷氏の見解は首肯されると思われ。

5. 「ウズ」の衰退

「ウズ」は<対句的表現乃至中止法>という用法を以て、「ウズル」に比して、なおその命脈を保っていたかのように思われるのであるが、この語もさほど時期を隔てずに衰退してしまうのである。たとえば、『続狂言記』（1700）で9例、『狂言記拾遺』（1730）では3例となっており、この時期において既に一般的ではなくなっているように見える。現代語に於ける推量・意志に与る助動詞が「う」系列の語によって行われているということからすれば、「ウズ」も最終的には「ウズル」と同様に「う」系列のなかに取り込まれていったものと考えてよさそうに思われる。しかしながら、先述の如く、「ウズ」は「う」優勢の傾向が認められる狂言資料等においても<対句的表現乃至中止法>という用法に積極的な働きを果たしていたのであり、その衰退理由についてはもう少し考える必要がありそうに思われる。

そこで、「ウズ」が衰退したのは何故かであるが、これについて、筆者は近世初期に成立する接続助詞「し」が関係しているのではないかと考えたい^{注3}。

36) このアパートは静かし、日当たりもいい。

37) 同窓会には山田も来たし、佐藤も来たし、高橋も来た。

38) 今日は給料日し、久しぶりに外食でもしようか。

39) 雨は降るし、駅は遠いしで、とても疲れたよ。

接続助詞「し」には上の例に見るように、その用法には大きくく並列の関係を示す用法<と<理由を示す用法>とがある。これは「ウズ」に特徴であったところの<対句的表現乃至中止法>という用法と同じ働きを示していると捉えられる。

40) わごりよにははなをみせうず。それがしははなをかがうとをもひすよ

(虎清本「さるさとう」)

41) 「我この難儀を通れさせられうずる事を教へませうず、しからば我が身を自由

に為させられい」と、

(天草版伊曾保・418)

用例 40 は並列句の前項に「ウズ」が使用されたものであり、用例 41 は「ウズ」を有する句が下句に対する理由となるものである。

さらに「ウズ」との関係からすれば、次のようなく助動詞「だろう／う」＋接続助詞「し」>に注目されよう。

42) 太郎も来るだろうし、花子も来るだろう。

用例 42 の<助動詞「だろう／う」＋接続助詞「し」>は「ウズ」の用法（対句的表現の前項に位置する用法）と同様のものと見ることができそうに思われる。

このように接続助詞「し」は「ウズ」の用法上の特徴である<対句的表現乃至中止法>という機能を担うという点に於いて注目されるのであり、「ウズ」の衰退理由を考えるにあたっての手がかりになりそうに思われる。

そこで、「ウズ」の衰退との関連が予想される接続助詞「し」の発生時期であるが、これは『虎明本』『天理本』に見られる助動詞「まい」に承接した例がもっとも早い例のようである。「虎明本」に5例、「天理本」に3例見出せる。以下にその例を示す。

43) 路次すがら付合をして、付たらは松を取るまいし、ゑ付ずは松をとらふ

(虎明本「ふじまつ」)

44) 今からは酒もたべまひし、ましていさかひも致まひ、このたびはかんにんしてくだされひ

(虎明本「こひ簪」)

45) 道すがらなぶって、ちがふたらはやくにたゝぬばうずじやあらふ程に、おくまひし、あふたらばしゆせうなことじや程におかふ、まず、名をとふてなぶらしめ

(虎明本「腹不立」)

46) 宿へもどつたり共、女子がよせまひし、今さらにあひていたそうと申すものなし、

(虎明本「三人がたは」)

47) 身共がわごりよにてきたひもせまひし、どこなりとも、きりたからふ所から思ひのまゝにきらしめ

(虎明本「ぶあく」)

48) おのれが西行とおやこではあるまひし、似合わぬ西行だて、ぬかすと云て

(天理本「お冷」)

49) よそへ御ざつても、経はしらせられず、勤めはなるまひし、なされ様があるまひと云

(天理本「小傘」)

50) 牛は足があつて歩く、道でわれに抱かれうとは云まいし、牛について行計、ならいではと云

(天理本「木六駄」)

上の用例を見るにその意味用法は現代語のそれと同様のものと見てよからうと思う。例えば、用例 43、44、45 は<並列>を表しており、用例 47、48 は<理由>を表している。このように接続助詞「し」は助動詞「まい」に承接して現れるが、これに続いて、助動詞「う」に承接した例が見られるようになる。

- 51) 御世に御出でなされたらば、おれもじや／＼馬に乗らうし、其時はそちも乗物に乗せて歩かさうぞ (好色伝授 / 1693)
- 52) 御前にも喜ばしましよし、又内祝も致しましとぞんじまして (好色伝授 / 1693)
- 53) 恥を捨てて言うたらば、国の迎ひが蔵屋敷で、つい銀を調べ、国に連れて帰らうし、時にはこなたと縁切れる。 (心中刃は氷の朔日 / 1709)
- 54) 今でも梅川が、サア出るに極らば、借錢もあろうし、ないても二百五十両 (冥途の飛脚 / 1711)
- 55) きさに据ゑてもらはうし、二郎兵衛に手伝ひさしよ (今宮の心中 / 1711)
- 56) さぞ見たからうし見せし、 (夕霧阿波鳴渡 / 1712)
- 57) 芝居果に長作が銀持つて来るか、こゝへもぱつとはづまうし、こちが出見世の仕舞は、少し取る掛もある (生玉心中 / 1715)

上に示したように 1600 年末から 1700 年始めにかけて「う」に続いた例が見られるようになっている。これ以降に見られる助動詞「う」に承接した例を以下にいくつか示そう。

- 58) 久しぶりて三両と言小判を持てあそぶ事じやなんでも廻しの八兵衛にも思ひ切二分やろうし… (白増譜言経 / 1744)
- 59) 尾張屋の五助にも壺分仲居さんにも久しいやくそくじやに鼻紙袋をかつてやろうし… (白増譜言経 / 1744)
- 60) 是非なく一座済て迎の来るを待ちかねてみさんすお客も有らふしお富の札と同じ事でてんぼな買物では有わいナ (無論里問答 / 1776)
- 61) 盛場の小児だとして、鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらうし、寺地の者だとして、葬礼の強飯を食ふものもあらうし、又食ふと限る事もねへネ (浮世風呂 / 1809 ~ 13)
- 62) むかしの芭蕉は名人上手で、後世に名を残すほどのお人だから野宿もせうし、山坂で難義もして行脚さしつたらうが、徳が備つてあるから災をはらふ。 (浮世床 / 1813 ~ 14)

ここで「ウズ」の使用状況を改めて見てみることにしよう。『狂言記正編』(万治三年・1660)では56例見られたが、『続狂言記』(元禄十三年・1700)では9例、『狂言記拾遺』(享保十五年・1730)では3例となっており、1700年頃を境に「ウズ」が激減しているが、ちょうどその頃に助動詞「う」に承接した例が見られ始めているのであり、両者は無関係では無いように思う。

これまで述べ来たように、「ウズ」は<対句的表現乃至中止法>という用法を以て「ウズル」に比してなおその命脈を保っていたのであるが、これも接続助詞「し」が成立し、<助動詞「う」+接続助詞「し」>が行われるようになったことにより、その存在意義をなくし、衰退していったものであろうと考えられる。

注

- 注1 『狂言台本の国語学的研究』（1977）笠間書院に採録されている。
- 2 「助動詞『う』『うず』『うずる』の語形・用法に関する一考察－狂言古本を中心に－」（『国語学』86集）
- 3 接続助詞「し」の成立事情に関しては拙稿「接続助詞『し』の成立過程」（『島大国文』28号）にて私見を述べたことがある。

（きょう けんじ・島根大学法文学部助教授）